

『平家物語』の横笛説話と高山樗牛の『滝口入道』

穴 吹 陽 子

序

『滝口入道』は高山樗牛が明治二十七年の説売新聞の歴史小説・脚本募集に応募し、二等（等の該当作なし）で首席となった作品である。そして同年四月十六日から三十三回にわたって説売新聞に連載され、世に広く読まれるに至った。この『滝口入道』は、『平家物語』巻十の「横笛」から「維盛入水」までから多く材を得ている。

時は平家全盛の世、入道相国の催した花見の宴で、小松殿の嫡子維盛は家臣重景と青海波を見事に舞い、人々の喝采を受ける。その後一人の美少女が舞を納める。この少女が中宮の曹司、横笛である。この宴に仕候した小松殿の侍、斎藤滝口時頼は、筋骨逞しい大丈夫で、近頃の文弱の流れを憂えていたが、この日から横笛に心を奪われる。剛の者であった滝口は、一変して以前嫌っていたような武士になり変わる。滝口は横笛に恋文を送るが、いくら送っても横笛からは何の音沙汰もない。滝口は苦悩する。そし

てその思いが恋だと気づいた時、一女子に迷って武士道を怠ったことを悔い、武士魂の曇らないことを自らの姿に求める。しかし、その姿は以前とは似ても似つかぬ痩せ衰えた姿であった。

ある日、滝口は父茂頼に横笛を妻に迎えたいと願ひ出る。滝口の出世に心くだく茂頼は、出世の役に立たずと反対し、諫める。滝口は次に出家の願ひを申し出る。それに対し、父は平家への忠と親への孝を説いて諫める。

一方、主家である小松殿は重病である。滝口は出家の意志を固め、暇乞いに参ずるが、小松殿は自分の死後の維盛のことを頼み置く。その帰り道、滝口は中宮御所へ出向き、そこで重景が自分を落とし入れようとしていたことに気づく。横笛のこともままならず、人の醜さも見てしまった滝口は出家する。

横笛は重景と滝口の恋文の前に、途方に暮れていた。そして世を捨てる程思ってくれた滝口への申し分けなさから、滝口を追って嵯峨の往生院まで訪ねて行く。やつのことだとどり着き、対面を乞うが、滝口は順として会わない。

ある日滝口は深草に出かけて行き、そこで横笛が出家した後死んだことを知る。

平家は滅亡への道を歩んでいた。平家の都落ちを目にした滝口は高野山へ移り住む。
小松殿が死んだ後、清盛の非行に歯止めをかけるものはおらず、維盛・重盛主従が、平家の陣である屋島を抜け出して、滝口を頼って高野へ赴く。出家した後、都へ行き妻子に会いたいと言う維盛を、滝口は一門と運命を共にするよう諫める。維盛主従は滝口の庵室を出て和歌の浦で入水する。滝口もこの主従の後を追いつ腹する。

1

『平家物語』との相違点として、まず滝口と横笛の邂逅の場面が挙げられる。

『滝口入道』では、清盛の催した花見の宴を設定している。この宴で、横笛は舞を舞い、その場の人々の目を奪う。

『平家物語』では、

…十三のとし本所へまいりたりけるが、建礼門院の雑仕横笛といふおんなあり、滝口これを最愛す。(巻第十 横笛)

とあるだけで、邂逅の場面は描かれていない。諸本である南都本、長門本、源平盛衰記に邂逅の場面がわずかに書かれているが、宴としていないものはない。実際の邂逅の場面は不明であるが、人々

に受け入れられる出会いを設定するために、樗牛は宴を選んだ。

『源平盛衰記』には

横笛ト云ハ。本ハ神崎ノ遊君、長者の娘也。大方モ無雙ノ能者。今様朗詠ハ所ノ風俗ナレハ云ニ及ス。琴琵琶ノ上手。歌道ノ方ニモ勝タリ。

とあり、今様などの芸に秀でていたらしいことが伺える。『平家物語』と『源平盛衰記』は樗牛の少年時代からの愛読書であったのでここから考え出したと思われる。

廣島一雄氏はその論文「『滝口入道』覚書—平家物語との距離—」の中で、

…ゲーテの「若きヴェルテルの悩み」などを想起しながら、樗牛は主要人物邂逅の場などを組み立てていったものである。(注)邂逅の場を花見の宴に置いたのは、「平家物語」と無縁である。主人公は、その宴で舞った女主人公の姿に心うばわれたのであるが、そこに「若きヴェルテルの悩み」の、たとえばヴェルテルが初めてロッテと舞踏会に行くことを約束した部分などが、屈曲した経路のはてに浮び出たのではないだろうか。樗牛が「滝口入道」執筆以前に、「若きヴェルテルの悩み」に接していたことは、明治二十四年七月二十三日から同年九月三十日までにかけて訳出した「准亭郎の悲哀」によって知ることができる。(略)

と述べている。滝口の横笛への恋の苦悩、最後に自殺という経緯

は「若きヴェルテルの悩み」の影響を認めることはできる。しかし、この宴の場面は、「ヴェルテルが初めてロッセと舞踏会に行くことを約束した部分などが、屈曲した経路のはてに浮び出た」のではなく、『平家物語』の「熊野参詣」から案を得たというべきである。これは維盛主従出家の後、宿願を果たすために熊野を訪れた維盛を、よく見知った僧が同行の僧らに語った言葉の中に出てくる。

あの殿のいまだ四位少将ときこえ給ひし安元の春比、法住寺殿にて五十御賀のありしに、(中略)此三位中将、桜の花をかざして青海波をまうて出られたりしかば、露に媚たる花の御姿、風に翻る舞の袖、地をてらし天もか、やくばかり也。女院より関白殿を御使にて御衣をかけられしかば(中略)内裏の女房達のなかには、「深山木のなかの桜梅とこそおほゆれ」などいはいれ給し人ぞかし。(卷第十 熊野参詣)

一方、『滝口入道』では、

…露のまゝなる桜かざして立たれたる四位の少将維盛卿。御年辛く二十二、青絲の髪、紅玉の膚、平門第一の美男とて、かざす桜も色失せて、何れを花、何れを人と分たざりけり。

(中略)何れ劣らぬ優美の姿、適怨清和、曲に随て一絲も乱れぬ歩武の節、首尾能く青海波をぞ舞ひ納めける。満座の人々感に堪へざるは無く、中宮よりは殊に女房を使に纏頭(うきだまり)の御衣を懸けられければ、(中略)跡にて口善悪(くぜんあく)なき女房共

は、少将殿こそ深山木の中の楊梅、

と描かれ、桜の花をかざして青海波を舞うこと、女院(中宮)から御衣をたまわったこと、女房たちに「深山木の中の桜梅(楊梅)」、(注)平家物語でも諸本によっては「楊梅」となっている。と言われたことなど酷似している。『平家物語』で描かれた場面は後白河院の五十の御賀であるが、平家一門が院や天皇に影響を及ぼす程の勢力があったことからしても、清盛主催の花見の宴が、院の五十の御賀と並ぶ程盛大豪華であつてもなんの不思議もない。そして芸達者であつたと記す「源平盛衰記」を参考にすると、横笛に舞を舞わせ、廻近の場面を作り出したといえるだろう。従つて『平家物語』とは無縁であるとは言ひ難い。

次に、滝口の容貌について、『滝口入道』では、

性潤達にして身の丈六尺に近く、筋骨飽くまで逞しく、(中略)浮きたる世の雑言(ざれこと)は刀の柄の底程も知らず、(中略)空舷撫(くはな)で長剣の軽きを叩(たた)つ二十三年の春の今日まで、世に畏ろしき者を見ず、出入の息を除きては、六尺の體(からだ)、何處を臆(おそ)と分つべくも見せず、

という屈強の武士として現れる。しかし、『平家物語』では、

布衣に立烏帽子、衣文をつくろひ、髪をなで、花やかなりしおのこ也。(卷第十 横笛)

と描かれ、文中に見える限りでは当世風の武士に近い様子である。これは、『滝口入道』において、滝口が恋によって様が変わり果

ててしまふ、その対照を明らかにするための樗牛の演出であるといえよう。

また、小松殿は滝口に遺言として維盛のことを頼み置くが、これは『平家物語』には全く見られない。

そして、維盛が滝口を頼って高野山へ登って来た時、維盛は、武士姿では京へ入れないことを悟り、滝口に出家を願い、僧形で京の妻子に会おうと考える。『平家物語』では、初めは妻子に会いたい一念で屋島を出るが、生け捕りにされて恥をさらすことは平家の嫡流としてできないと考え直し、滝口を頼って出家し、宿願であった熊野参詣後、入水する。『滝口入道』の維盛は、妻子への未練断ちがたく、滝口の諫言に会うまで自分の思慮の浅さに気づかない。そしてその諫言に自らの行動を恥じ、重景とともに入水する。『滝口入道』の維盛は、『平家物語』のそれより思慮浅く、未熟である。

小松殿の遺言、維盛の未熟さと行動は、樗牛の作り出した虚構であり、最後の滝口が維盛を諫める部分、ひいては滝口切腹への伏線となっている。

また滝口が、横笛との結婚を願ひ出ること、父に諫められる以前に出家を考えていたこと、嵯峨から高野山へ移る動機、などの違いがあるが、これらについては、前掲の廣島氏の論文に詳しい。

この他、滝口と横笛の関係と、滝口の自己本位な性格に『平家物語』との違いが大きく見られる。この二点について詳しく見て

いく。

2

『滝口入道』では、滝口と重景の求愛に迷う横笛が描かれる。

『平家物語』では、滝口と横笛は相思相愛の男女として現れる。滝口と横笛の間柄を示す文章としては、

建礼門院の雑仕横笛といふおんなあり、滝口これを最愛す。

(巻第十 横笛)

と、滝口が出家したと聞いた、横笛の言葉、

「われをこそすてめ、さまをさへかへけん事のうらめしさよ。たとひ世をばそむくとも、などかかくとしらせざらん。」

(巻第十 横笛)

の二箇所のみである。この短い文章の中からでも、横笛と滝口が深く契りを結んでいたといえるだろう。

『平家物語』に全く現れない滝口の好敵手として樗牛は、維盛の従者重景を置いた。滝口は昔風の武骨者の武士、そして重景は当世風の美男子である。容姿・氣質は対称的な二人である。

花見の宴の後、横笛の元には数多くの恋文が届けられる。まだ、都に出てきたばかりで世慣れぬ横笛は、どう返事をしてよいのか分からず、そのまま日を過ごすうちに、恋文の数は減っていった。最後に残ったのが滝口と重景の二人であった。横笛は二人の文をみるにつけてもどちらも同じくらい心ざし深く、人の評判を聞い

ても、滝口の武勇人たるを誉めるもあれば、重景の容姿の優れたるを誉めるもある。そして共に小松殿の家臣で、世間にも知られた名士である。どちらに決めようにも比べようがないのである。

横笛は滝口と重景の間に挟まれて悩んでいた。どちらも甲乙つけがたい様子である。いつも重景の文伝えをする冷泉という老女は、重景からの報酬目当てに滝口を悪し様に言う。滝口が自分への恋に世をはかんで出家したと聞くに及び、滝口の心ざしの深さを今更ながら感じ、それに比べて冷泉に讒言を言わせる重景を疎ましく思う。横笛は二人の「板挟み」の結果、一方が苦しむ恋心に世を捨てたと聞くに及び、そちらに深い心ざしを見る。そして女房たちに「可惜勇士に世を捨てさせし」と言われ、自分の責任を痛いほど感じ、許しを乞おうと滝口を訪ねる。この場合、横笛の滝口に対する感情は申し分けなさで憐みである。決して恋愛感情からではない。

嵯峨に滝口を訪れた横笛は、

……心狭き妾に、耻ぢて死ぬとの御事か。無情かりし妾をこそ憎め、可惜武士を世の外にして、様を変へ給ふことの恨めしくも亦痛はしけれ。茲開け給へ、思ひ詰めし一念、聞き給はずとも言はでは已まじ。

と訴える。しかし対面は果たせない。その後、横笛は罪の意識から出家し、その思いが積もったためか死んでしまう。

滝口は深草へ赴き、老女から「恋塚」の話聞く。その恋塚は

果たして横笛の墓であった。そしてつれなく追い返した自分を悔いる。

横笛と滝口に、重景を加えることにより、板挟みに悩む女性が現れた。そして、ままならぬ恋と、重景の讒言から人の世の醜さを見た滝口は、それにより出家する。これらのことは、滝口を自己本位な人間として描くのに必要な要素であったといえる。

3

このようにして、滝口が自己をはっきり持った人物として登場するが、犂牛はどうして滝口をこのように描いたのだろうか。滝口の性格について見ていく。

平家一門の人々は、文弱の流れに染まって、刀もいつの間にか白銀造りの細鞘に変わり、衣装も優美な物になり、弓矢の代わりに管弦の調べに手を染めるなど、武士でありながら武士道を忘れたような有様である。その中で、

奴も心得ぬ六波羅武士が挙動かな、(中略)弓矢の外には武士の住むべき世有りとも思はぬ一徹の時頼には、兎角なやみ慨はしく、苦々しき事のみ耳目に觸れて、平和の世の中面白からず、あはれ何處にても一戦の起れかし、いでや二十餘年の風雨に鍛へし我が技倆を顯はして、日頃我を武骨者と嘲りし優長武士に一泡吹かせんず

と一人気を吐いている時頼は、周囲の人々に時流に合わない頑固

者と見られている。しかし、滝口は我が信じる武士道を突き進んでいるだけである。つまり、確固とした信念を持っている人物といえる。このような信念、つまり自己を持っていけない人々が、時流に乗っていくのである。

その滝口も恋に心を奪われるに及び、武士道を怠り、以前は馬鹿にしていた当世風の武士姿になってしまふ。我が恋心に気づき、いつしか当世風の武士になった滝口は、再び武士道に生きよう、いやそれでも横笛は諦め切れぬ、と心の中で葛藤する。武士道に生きるには横笛は諦めねばならない。一徹の滝口には両方を同時に取ることはできないのである。しかし、恋の一念はすっぱりと断ち切ることができないと気づき、それでは武士道もままならぬと出家を考えはじめ。許されぬと分かっているながら父に横笛を妻に、と申し出、それが拒絶されると出家を願ひ出る。父は、平家への忠と父への孝を盾に諫めるが、滝口は聞き入れない。そして最後の暇乞いに主君、小松殿を見舞い、滝口が出家するとも知らぬ小松殿に嫡子継盛のことを頼み置かれても出家の意志は動かない。また、同じく横笛に心をよせる重景が、滝口を落とすめようとしていたことを知り、一時は怒ったが、

「何事も今の身には還らぬ夢の、恨もなし。友を売り人を許る末の世と思へば、我が為に善知識ぞや、……」

と、浮き世を捨てて者には、このような世の醜さを見たことはかえって善知識であると考ええる。

横笛への恋に破れた滝口は、文弱の当世流の武士姿になり変わったが、その姿では父への恩、小松殿の恩には応えられないと考える。以前のように他人に武骨者と嘲られようとも自分が信じていた武士姿でなくては彼自身許せなかった。しかし、この浮き世にいる限り愛欲は断ち切ることができないと分かっている彼には、以前のような筋骨逞しい武士に戻ることはできないこともまた明らかだった。愛欲の束縛を受け、我が信じる武士道に戻ることも叶わず、このままでは父への恩、主君への恩にも応えることができないというように、彼が持ちうる可能性の全てを否定され、残された道はただ一つ、世を捨てることであつたといえる。これは滝口があまりにも一徹であり、自らを追い込んでしまったためにおこつた思考であつた。

『滝口入道』とはほぼ時期を同じくする小説として幸田露伴の『五重塔』（明治二十四年―二十五年）が挙げられる。『五重塔』は『風流佛』に始まる露伴の職人氣質物の最後に位置する作品であり、この作品で露伴は個人主義を確立したといわれる。

大工の十兵衛は、「のつそり」とあだ名を付けられる程寛大な氣質である。その氣質のために仕事も取り逃がしがちで、腕は良いが暮らし向きはかばしくない。

谷中感應寺に五重塔建立の話があることを聞くやいなや、十兵衛はその仕事をしたいと思う。十兵衛の親方源太に、という話で

あつたが、十兵衛は構わず、

「……思ひ詰めて参上りました、その五重塔を（中略）為せて、五重塔の仕事を私に為せていたゞきたい、それで参上しました、川越の源太様が積りをしたとは五六日前聞きました、それから私は寝ませぬは、御上人様、五重塔は百年に一度一生に一度建つものではござりませぬ、恩を受けて居ります源太様の仕事を奪りたくはおもひませぬが（中略）晴れて居る空を見ても燈光の達かぬ室の隅の暗いところを見ても、白木造りの五重の塔がぬつと突立つて私を見下して居りますは

と上人に願ひ出る。

そしてどちらかに任せるか決定する日、上人は仏説を引き、兄弟は互いに助け合うものだと言教し、はつきりと決定はしない。

その帰り道、十兵衛は、

「何にも彼にもならぬことぢや、相手は恩のある源太親方、それに恨の向けやうもなし、何様しても彼様しても温順に此方の身を退くより他に思案も何もない歟、（中略）固より我は弟の身、ひとしほ他に譲らねば人間らしくも無いものなる、嗚呼弟とは辛いものぢや

と思う。一方、源太親方は、上人の言葉を開き、十兵衛に二人で建てようともちかける。有難いはずのこの申し出に、十兵衛は、二人で為うとは情無い、十兵衛に半分仕事を譲つて下されう

とは御慈悲のやうで情無い、厭でござります、（中略）一つの仕事を二人でするは、よしや十兵衛心になつても副になつても、厭なりや何しても出来ませぬ、

と断る。

その後、源太親方が辞退したため、五重塔は十兵衛に任される。源太親方は好意で自分が作つた見積りを十兵衛に譲ろうとするが、十兵衛は固辞する。

この十兵衛の頑なさには相当なものである。十兵衛は、五重塔を建てるまでそれ程強く望むということはなかつたのである。それが五重塔建立を聞くや、人が変わった様に執着する。その執着は、世話になつて居る源太親方の仕事にも関わらず、願ひ出るところに現れる。しかも二人合作ではなく、「一人で」建てることを望む。つまり、十兵衛は、この五重塔建立に自分の存在意義を求めたのである。いつも「のつそり」と馬鹿にされ、立派な腕がありながら人に認められずに終わることは十兵衛にとって悲しかった。自分一人で建て、それが認められればそれでよし、認められなければ自分の腕はその程度、つまり個としての存在意義がない、と諦めもつく。そのために「一人」にこだわった。

塔が完成し、落成式も間近という日、暴風雨になり、五重塔は倒れんばかりに揺れ、揺らぐ。十兵衛は板一枚吹きめくられても死をも辞さぬといった覚悟で塔に登る。ここに、自らの存在意義である五重塔を信じ、また責任を一身に負おうとした十兵衛の姿

勢が示される。

露伴は、一徹で自己を押し通していきながら個の存在を求める十兵衛を描くことで、個人主義を確立した。

樗牛は、露伴の作を評して、

惟ふに彼が著作はおしなべて是の一種の個人主義に據りて製作せられたるには非ざるか。吾等の見る所を以てすれば、子が作には常に一個の觀念と名くべきものを有す。例へば、「風流佛」の如き、「一口剣」の如き、はた又「五重塔」の如き、皆之れ殆ど同一のモラルを以て之を貫けるものには非ざるか。即ち一念の強さは岩をも穿つべし。一念にして屈せず撓まざれば、外来の勢力又吾れを奈何ともすべからず、精神一到何事か成らざるの意を鼓吹せるものと見るを得べからざるか。是の如く意を重むるは、子が作に於て見通し難き特色なり。

〔明治の小説〕 明治三十年六月

と述べている。樗牛は露伴の描く、自己の特質を持った人に個人主義を見た。樗牛が描いた滝口はどうであらうか。

滝口は「五重塔」の十兵衛と同じく一徹で自己を押し通していく人物として描かれる。ところが、平家が滅亡への道を歩むにつれ、滝口も死へと歩んでいくことになる。

出家後、滝口は嵯峨で行い澄ましている。恋焦がれた横笛の訪れにも心静かに対応できた程である。ところが平家一門のことと

なるとそうはいかない。

ある日六波羅あたりに大火があるのを見て取る物も取りあえず都へ向けて行く。果してそれは、平家の都落ちの日であった。その日以来、平家のいない都近くには居る用がないといった風に高野へ登る。

滝口は、出家により横笛のことは諦めることができた。つまり、愛欲からの自由は手に入れたわけである。しかし、仏に仕える身でありながら、平家一門のことは頭から離れない。維盛が滝口を頼って訪れた時も、出家してから都へ赴く、という維盛に同情し叶えようとした。ところが、一晩つくねんと考えると、小松殿に、

平家の嫡流として卑怯の挙動よふとなどあらんには、祖先累代の

耻辱是上あるべからず。維盛が行末守り呉れよ。

と頼み置かれたことを思い出し、断腸の思いで維盛を諫める。一門から落ちのびてきた維盛はいうまでもなく「卑怯の挙動」をしている。また、妻子への思いを断ち切れない、武士として恥ずべきことである。この「卑怯の挙動」を改めさせるために、滝口は維盛を一門のいる屋島へ帰るようしむけたのである。ところが維盛・重景が入水するに及び、小松殿の遺言を果たせなかった滝口は切腹する。

出家により浮き世の全ての物を捨てたはずの滝口であるが、武士を捨てることはできなかった。これは滝口の死に方に最もよく現れる。出家の目的は、煩惱を滅却して絶対的自由を手に入れる

ことである。滝口は出家の目的より、武士を捨てず、主君への忠を実現するという自己の意志に重点を置いた。自己の意志を重視するという点で、露伴の十兵衛と共通する。しかし、滝口は自己の存在意義を平家一門と小松殿の遺言に見ていた。決して、自己ではない。そして平家の嫡流を失うと同時に、小松殿の遺言も果たせなかった滝口には、もはや自己存在の理由はなくなったのである。

自己の意志を重視する滝口であったが、集団より個人、つまり自己に主要な意義を認めることはできなかった。樗牛は露伴の描いた自己の特質を持った人個人主義と解した。その点で当時の樗牛流個人主義と主我主義を『滝口入道』に取り入れることはできたといえる。しかし、個人主義の特徴である、集団よりも個人の意義を重視するという面を取り入れることはできなかった。

4

樗牛の少年時代からの愛読書であった、『平家物語』と『源平盛衰記』は、このように、個人主義にまで発展する小説として再生された。

それでは、樗牛が愛読していた『滝口入道』のもととなった『平家物語』は、どの諸本であらうか。見ることできた覚一本、屋代本、葉子十行本、流布本、百二十句本、八坂本、平松家本、鎌倉本、四部合戦状本、關靜録、南都本、延慶本、長門本の十三

本の中で考えていく。

横笛の死から考えると、『滝口入道』では出家後、死ぬことから出家譚といえる。該当する諸本は、覚一本、屋代本、葉子本、流布本、百二十句本、八坂本、平松家本、鎌倉本、南都本である。また、花見の宴の維盛の姿を、『滝口入道』では『深山木の楊梅』とするが、『熊野参詣』の場面で『楊梅』とするのは、流布本と八坂本のみである。覚一本などは『桜梅』とする。

このことから、出家譚の中でも流布本、八坂本のどちらかを読んでいたと考えられる。

八坂本（國民文庫刊行会編・大正二年十二月五日発行）の緒言に、

一方流に属する流布本には、寛永、正保、明暦、寛文、延宝、天和等の諸版ありて、殆く世に行はれたれども、城方流本にいたりては、未だ刊行せられたるものなし。

諸本	横笛の死	深山木の楊梅
覚一本	出家 ○	桜梅 ×
屋代本	〃 ○	なし ×
葉子本	〃 ○	桜梅 ×
流布本	〃 ○	○
百二十句本	〃 ○	なし ×
八坂本	〃 ○	○
平松家本	〃 ○	桜梅 ×
鎌倉本	〃 ○	〃
四部本	入水 ×	なし ×
關靜録	? ×	なし ×
南都本	出家 ○	なし ×
延慶本	出家入水 △	なし ×
長門本	入水 ×	なし ×
(盛衰記)	入水 ×	桜梅 ×

とあるように城方流（八坂流のこと）本として初めての刊行本であることを述べている。この記述がどのくらい信用の置けるものなのかは分からないが、この八坂本の初版が明治四十四年五月となっているの、樗牛死後のことである。このことから必然的に一方流の流布本ということができるのではないだろうか。

『滝口入道』は題のとおり、滝口を主人公として話が進められる。それまで注目を集めていた横笛にかわって滝口に注目が集められる。そして、その滝口は、坪内逍遙に、

身を殺しても仁を遂げ義を遂げし士堅気も、此塩梅にて写さるゝ時は、とんだ外強の心弱となり、眼中君父あつて我が身無かりし我が中古の武士魂も自意識のおそろしく鋭き主我的明治男と化し去る也。

（歴史小説に就きて）明治二十八年六月）
と言われているように、中世武士というよりは明治時代の男子なのである。

このように、『滝口入道』は『平家物語』から題材を取りながらも、時代に合わせて豊かに再生したといえる。

（参考文献）

・平家物語下 日本古典文学大系
岩波書店 昭和35年11月5日

・参考源平盛衰記下

臨川書店 昭和57年7月10日 複刻版

・樗牛全集 第五巻 博文館・春陽堂

明治42年6月13日 第九版

・幸田露伴集 日本現代文学全集

講談社 昭和38年1月19日

・『滝口入道』覚書 平家物語との距離――

廣島一雄 昭和43年3月

文学論議 東洋大学文学部国文学研究室

（香川県立香川中央高校教諭）

研究室受贈図書雑誌目録五

實踐國文學（実践国文学会） 第41号、第42号

就實語文（就実女子大学日本文学会） 第13号

淑徳国文（愛知淑徳短期大学国文学会） 第三十三号

樟蔭国文学（大阪樟蔭女子大学国語国文学会） 第29号

上智大学国文学科紀要 第9号

湘南文学（湘南短期大学） 第四号

女子大國文（京都女子大学国文学会） 第百十号 第百十一号

女子大文学 国文篇（大阪女子大学） 第43号

叙説（奈良女子大学国語国文学研究室） 平成3年12月

書陵部紀要（宮内庁書陵部） 第43号